

小児の発熱と薬物療法 No.25 (H15.9)

小児の発熱の原因として最も多いのは、カゼや扁桃炎に代表される感染症によるものです。小児の体はカゼのウイルスや細菌などが体内に入ってくると、これらをやっつける反応がいくつか起こります。発熱もその防御反応の一つで、体温を上げることによりウイルスや細菌を増殖しにくくするとともに、体を守る「免疫」といわれる働きを活発にします。すなわち、本来発熱は病気そのものではなく、病気と闘っているしるしなのです。

これを解熱剤によってすぐに熱を下げてしまうと体に備わった防御機構の働きを低下させ、かえって感染症が長引かせる場合もあります。小児が元気で機嫌が良いようでしたら 38.5 ぐらいまでは薬を投与しないで様子を見ているのも一つの方法だと思います。

それでは、なぜ解熱剤が繁用されるのでしょうか？それは、あまり長く高熱が続くと子供は体力を消耗してしまいます。熱が 1 上がるごとに、約 13%もエネルギーの消費が増えると言われていています。その上、熱のために食欲もなくなるので、体力が低下しており、回復力も低下します。免疫力維持や損傷を受けた組織の回復に必要なタンパク質までエネルギー源として消費されてしまうと他の感染症も合併しやすくなるからです。

それ以外にも、小児が発熱することにより、不機嫌になったり、喘いだりする苦しそうな様子を母親がみると心配になってきますので、この心配を和らげる目的も多少あります。

最近、厚生労働省から小児のインフルエンザによる感染症に対して一部の解熱剤の投与がかえってインフルエンザ脳症の発症、重症化に関与している可能性があることが報告されました。インフルエンザが疑われるような小児の発熱には、強い作用の薬剤は使わないほうが良いということになりました。そこで比較的作用のマイルドなアセトアミノフェンが注目され、安全な小児の解熱剤として使用される機会が増えました。

現在、市販の小児用風邪薬のほとんどは解熱剤としてアセトアミノフ

エンが使われていますし、小児科から処方される解熱剤もアセトアミノフェンが多いようです。

この薬の作用発現時間は、内服薬の場合、服用後、個人差はありますが1時間ぐらいで解熱作用が出始めて、持続時間は約5～6時間です。坐薬は、内服薬よりは即効性で30分後ぐらいから効果がみられ、5～6時間続きます。坐薬は、経口投与が難しい赤ちゃんや小児で吐き気が強く飲んでも、すぐにもどしてしまう様な時に使用されます。

比較的副作用が少なく、安全性が高いといわれているアセトアミノフェンですが、一般用医薬品のかぜ薬の配合剤としても繁用されていますので、過量投与には十分注意して下さい。誤って多量のアセトアミノフェンを使ってしまった場合、体温の過度の低下を伴って危険なこともあります。そのような時は、アセトアミノフェンの作用を弱める解毒剤がありますので、医師、薬剤師に相談し対処して下さい。

最後に、解熱鎮痛剤は、あくまでも対症療法で、原因療法ではない事を把握し、かつ用法用量をしっかりと守るように心掛けて下さい。